

中学・高校生のための『サイエンスカフェ』

主催：日本学術会議、淑徳巣鴨中学・高校
日時：平成26年2月28日（金）15：50～17：10
場所：淑徳巣鴨中学・高校
講師：小玉重夫さん（日本学術会議連携会員、東京大学大学院教育学研究科教授）
ファシリテーター：宮川智香さん（特定非営利活動法人WEBREIGO理事長）
参加人数：21名



平成23年12月に公表された総務省の「常時啓発事業のあり方等研究会」最終報告書では、将来を担う子供たちに対して、学校での「政治的リテラシー」（政治的教養）の教育を強化することを提言しています。子どもたちへの政治教育は可能なのでしょうか。可能であるとすればそれはどのような条件のもとなのでしょうか。今回のサイエンスカフェはその研究会に参加された小玉重夫さんをお迎えして、現在公開中の映画『ハンナ・アレント』（ナチスの迫害に遭い、アメリカに亡命したユダヤ人の女性政治思想家が主人公）や、NHKの連続テレビ小説『あまちゃん』の例などをもとにしながら中学生や高校生、先生達や保護者の方々と一緒に進められました。

シティズンシップ（市民性）とは何か

シティズンシップとは、一つの政治体制を構成する構成員、あるいは構成員であることを指し公民性や市民性などと訳されることが多く、単なる都市の住民という意味にとどまらず、政治に参加する人という意味が含まれます。また、世の中のことを自分で考えて判断のできる人のことを市民と呼ぶ場合もあります。

映画「ハンナ・アレント」ではナチスの元高官アイヒマンの弾劾裁判を傍聴した主人公が、ナチスは極悪非道な人間達だけで構成されていたわけではなく、普通の人々がユダヤ人を虐殺したといえる。一部のユダヤ人もそれに手を貸したと主張して、ユダヤ人同胞から厳しくバッシングを受けました。アイヒマンについても、役人としては優秀で家庭では良き夫・父であったかもしれないが、自分の行っていること＝大量虐殺に加担したこと、の意味を考えられない人間だったということです。自分の行っていることの意味を考えなかった、つまりは“市民”ではなかったということです。

＜映画の予告編をスクリーンに投影して紹介しました＞

「あまちゃん」に見るアマチュアリズム

市民には、専門家（プロフェッショナル）ではない素人（アマチュア）という意味も含まれています。NHKの連続テレビ小説「あまちゃん」は、主人公の名前「天野（あまの）」

アキ」とアキの職業「海女（あま）ちゃん」、人生の「甘ちゃん（甘えん坊）」そして「アマチュア（アマちゃん）」という言葉を掛けたタイトルです。

くドラマのワンシーンをスクリーンに投影して紹介した後、小玉さんの問いかけ「主人公のセリフ『プロにはなれねえし。なりだくねえ。アマちゃんがいい。』と言ったときの主人公の気持ちはどんなものだったか？」についてグループディスカッションを行いました。結果を代表者が発表したののでいくつか紹介します。>

☆このドラマが地元の活性化に力を尽くすというストーリーだということなので、地元の人たちと同じ目線や立場で活動していきたいという気持ちの表れだと思いました。

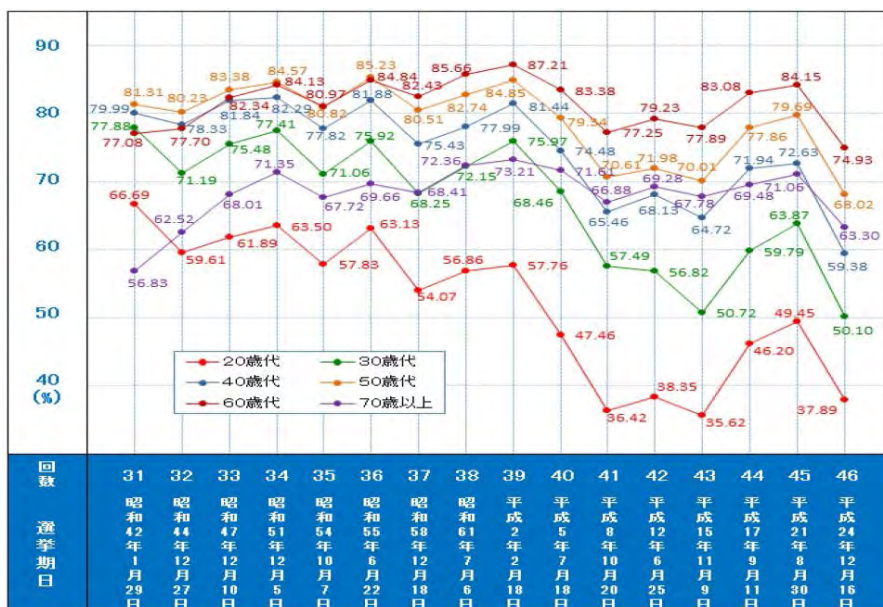
☆プロになると義務やノルマが発生するのでなりたくない、アマのままの方が気楽にやれるという気持ちなのではないかと思いました。

☆プロになるとたくさんのかん事を任せられ期待されますが、アマでいることで自分の感情や気持ちに素直に行動することができ、その方が復興活動のような場面では役に立てると主人公は考えたのではないのでしょうか。

☆プロには完成しているイメージがあり、もうすでに満足していると思えるのですが、アマは完成に近づくために努力しているので、それを大事にしていきたいとかんがえているのだと思いました。

参加者の意見を受けて、小玉さんは、社会人となって仕事に就くということはプロになるということですが、人間はプロとしてだけ生きているわけではなく一市民として生きる側面もあると話しました。「あまちゃん」の主人公が起こしたアクション（地元へ帰り震災復興に立ち上がる）の根っこにあるものは、アマチュアリズムなのだという見解を話されました。

選挙のことを考えてみましょう



財団法人明るい選挙推進協会HPより
<http://www.akaruisenkyo.or.jp/070various/071various/377>

続いて、政治に参加するという意味での市民について、選挙を例にして話し合いをしました。小玉さんから投票率の推移などを説明していただき、その後、「第44回（平成17年）と第45回（平成21年）の投票率が上がり、第46回（平成24年）で投票率が

下がったのはなぜでしょうか？」という問いかけに対して再びグループ討議が行われ、代表者が話し合いの結果を発表しました。

☆45回は民主党への期待の高まりが投票率に反映され、26回はその民主党政権の成果が期待されたほどのものでなかったことへの失望感が表れたのではないだろうか。

☆44、45回は小泉改革や民主党政権交代という、何かが変わることへの期待感があったから（投票率が）高かったのでは。選挙が行われた季節も関係あったかもしれない。46回は冬で寒かった記憶がある。そのため、あまり投票会場に行かなかったのでは。

このような意見発表を聞いた後で、過去3回の選挙のときの政治的背景などを小玉さんが説明し、郵政民営化の決定や高校授業料無償化の実現、消費税のアップなど選挙によって政治が動かされていることを明らかにしました。

ポイント

- ①争点が明確で分かりやすい選挙の時は投票率が高い。
- ②選挙の結果が政治（国）の方向性を決める。
- ③選挙に行って一票を投じることで政治に影響を与える。
- ④市民＝政治的・社会的に対立する問題（争点）に対して関心と判断力を持つような人、を養成する教育が必要。

高校卒業後の自分をイメージする



小玉さんは、学校という狭い世界から実社会という広い世界に踏み出す境にいる、今日のサイエンスカフェの参加者に締めくくりとして二つの言葉を紹介しました。

・アーリー・エクスポージャー：早くから社会や世の中のことがらにふれて、広い教養を身につける。

・レイト・スペシャリゼーション：視野の広い、教養を積んだ専門家になる。

「あまちゃん」の主人公アキが、岩手・北三陸で大人の海女さんたちとの交流や東京でのアイドルを目指したレッスンや様々な体験を通して広い世界にふれ、やがて地元に戻り海女ちゃんとして、地元系アイドル“潮騒のメモリーズ”として震災からの復興に自分なりに取り組んでいくことも、この二つの言葉と相通じるのかもしれないということでした。

ファシリテーターから * * * *

今回のサイエンスカフェにおいて注目すべきは、彼ら、中学生・高校生は小玉先生の解説を受け、他の参加者の意見も聞いたうえで、自分の意見を自分の言葉で堂々と表現していたところです。

質問された意味をよく理解し、自分たちで答えを出そうとする意欲と、学んだことを表現する楽しさが伝わってきました。決して誘導されるのではなく、感化されるのでもなく、自身がリテラシーをもって答えを探究しているようにみられました。すでに彼らは市民であり、レイト・スペシャリゼーションであろうとしていました。

生徒たちの可能性には目を見張るものを感じました。

子どもが早期から政治等に関心を持ち、知識を養い、自分で正しい判断ができるようになることは、民主主義を保っていく上でも大切なことです。

こうした機会の付与が今後もさらに展開ができますことを心から期待しています。
